論　文　要　旨

15 世紀フランス王国の宮廷文化における「東方」の表象
――ヴァロワ朝ブルゴーニュ家・アンジュー家を中心に――

原口　碧

本論文は、15 世紀のヴァロワ朝ブルゴーニュ家当主フィリップ・ル・ボンとアンジュー家当主ルネを対象に、それぞれの宮廷文化に表された「東方」の存在の諸相と意義を論じるものである。会計簿、財産目録、年代記、回想録、旅行記、図像を主な史料として、第 1 部では、東方に対するイメージが形成される過程をたどり、宮廷にもたらされた東方の情報や文物を調査した。第 2 部では、宮廷の祝祭空間における東方の表象について、4 つの事例を対象に考察を試みた。

第 1 部第 1 章は、ブルゴーニュ家における東方世界との接触の歴史と、東方問題への対応について論じる。14 世紀末のニコポリスにおける十字軍の敗北と、その後繰り返される遠征計画、援軍を要請するビザンツ皇帝とその使節との交渉、東方への使節派遣による外交と調査、あるいは十字軍への意志表明と、歴代のブルゴーニュ公は一貫して、東方を異教の地として捉え、十字軍のイニシアティブをとる君主としての姿を見せた。公家の蔵書記録への調査からは、東方の情報を与える書物や、東方遠征の理想像となりうる歴史や伝説上の英雄に関する書物を多数確認した。

第 2 章では、アンジュー公ルネの東方観について、アンジュー家特有の背景に焦点を当てて論じた。ルネにとって東方に関する最重要課題は、エルサレム、シチリア、ナポリの王位継承問題であった。三日月騎士団の創設やエルサレム王位の強調による、ルネの東方を暗示させる行為は、十字軍に直接結びつけられるものではなく、ナポリ王国をめぐる争いへの敗北を背景にし、権威の回復とナポリ奪回に向けた意志の反映であった。ルネと東方の関わりは、宮廷にもたらされた舶来品により強く現れており、会計簿への調査を通して、ルネの宮廷における東方の文物の諸相について論じた。交易や北アフリカの君主からの贈与を通じてルネにもたらされたものは、服飾品から織物、調度品、武器や武具、書物、そして動物やムーア人、トルコ人にいたるまで多岐にわたっており、その多様性を示すとともに、宮廷で重宝されている様子が記録から明らかになった。

第 3 章では、フィリップ・ル・ボンに派遣され、東方を旅したベルトランドン・ド・ラ・ブロキエールによる東方衣装の描写を考察した。自らもトルコ人の扮装をし、現地の人々と触れ合うことでより深い観察が可能となった、ブロキエールの数々の詳細な衣装描写を提示した。また、旅を終えたブロキエールが、購入した東方衣装をフィリップに献上したことや、数年後の会計簿にフィリップが「ブロキエールの衣服」に似せたものを作らせた記録が残されていることに注目し、東方衣装の伝播と受容の一例としての可能性を指摘した。他方で、旅行記写本の挿絵に描かれた、トルコ

風の衣装をまとうブロキエールと黄金の甲冑姿のフィリップについて、東方衣装の他者性と十字軍司令官フィリップの優越性が対照的に表現されていることを指摘し、十字軍構想のなかで制作された写本の性質を再確認した。

第2部第1章では、フィリップ・ル・ボンによって開催された「雉の祝宴」における、十字軍とトルコの暗示について、色彩の象徴という観点から論じた。まずは、ブルゴーニュ宮廷における紋章やドゥヴィーズに関わる色彩文化について論じ、フィリップの象徴として仕着せに頻繁に用いられる「ブルゴーニュ公の色」の存在を確認した。「雉の祝宴」では、前年のオスマン帝国によるコンスタンティノープル陥落を受けて、加熱する対「トルコ」十字軍計画の正統性が、余興によって演出された。そこでは、トルコには異教性を表す緑、＜聖なる教会＞には修道服の白や黒、＜神の恩寵＞には神の光を表す白、＜12の美徳＞にはブルゴーニュ公および金羊毛騎士団の色である黒、灰、赤、金が用いられた。以上の色彩の象徴を用いて、神の恩寵に与ったフィリップの十字軍が、トルコによって脅かされる教会を救い出すという、フィリップの描く構図が、明示されていることが明らかになった。

第2章では、アンジュー公ルネによって開催された3つの祝祭を事例に、異なる目的で演出された異国のモチーフへの考察を試みた。ナンシーの馬上試合では、エルサレム王の紋章衣をまとい、トルコ風の従者を引き連れて登場したルネの意図を、シャルル7世を前に、王としての存在を強調することで、対等な立場であることへの主張と捉えた。ソミュールの武芸試合では、登場するムーア人とライオンが、騎士たちが乗り越えるべき難所に喩えられていることを指摘した。そして東方の異教世界や古の騎士の理想像によって引き立てられた壮麗な武芸試合が、参加者にも外部に対してもルネの威光を示すものとなった。次に論じた『アウェニル王の聖史劇』では、インドやエジプト、ギリシアの登場人物や異教の神々を嘲笑しながらも、豊富で細やかな描写からは、台本の注文者ルネの異国趣味が垣間見られた。聖史劇という大勢の観客が集まる場で演出された異国の表象は、上演によって東方のイメージを拡散させたことが窺える。

「東方」を軸として、ブルゴーニュ公とアンジュー公を比較することにより、それぞれ固有の歴史観や外交政策が浮き彫りになった。しかし、目的や背景は異なるものの、いずれも東方を支配する君主としての理想像を求め、それを自らの政治に活用していたことは共通していた。そこには諸侯である両者が、王に匹敵する権威を獲得しようとする姿勢を見出すことができる。以上の結論を導き出すとともに、本論文では、祝祭空間への考察を通して、政治的・文化的両側面から東方の表象について論じることが可能となった点、また蔵書や所有品、旅行記への考察を通して、東方の情報や文物が伝播し、受容され、そして共有される様子を明らかにした点を成果としたい。